社楽
SHA RAKU

神奈川県立川崎図書館が所蔵する
全国有数の**〈社史コレクション〉**を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。

Vol.58

2016/08

渋谷で社史フェア 報告

２０１６年7月8日（金）と9日（土）、東京・渋谷で社史フェアを出張開催しました。この「社史フェア ｉｎ ＳＨＩＢＵＹＡ」は、朝日新聞社メディアラボの後援で実現しました。出張開催ははじめてのケースです。

渋谷駅の最寄りの改札口から、徒歩５分程度にあるビルの４階が会場です。

社史フェア２０１５と２０１６で展示した社史のうち、特色のあるものなど１００点を選んで展示しました。

落ち着いた音楽が流れる大きな窓のある空間の、曲線を活かした机の上に展示すると、県立川崎図書館でみる社史とは、すこし違った印象になります。

▲ 会場の様子です。社史 100 点を展示しました。

展示だけでなく、会場内のスペースでは初日に『医学書院の７０年』編纂に関する講演会、二日目に展示している社史の見どころガイドなども行いました。

今回の渋谷での開催に関わったスタッフは「外部での社史フェア開催は、とても新鮮で大きな刺激になりました。今回の開催で得たものを来年以降に活かしたいです。」とコメントしています。

●

来場者へのアンケートで「社史フェアの渋谷での出張をどう思いますか？」という設問では、アクセスのよさに関する記述が多かったです。今回の出張開催を契機に、これまで県立川崎図書館の社史室を知らなかった方にも社史室をＰＲできたと思います。１万８千冊が社史室で利用できる社史室にも、是非ご来訪ください。お待ちしています。

（科学情報課　高田）

外箱にも注目してみよう！

あるとき、外箱に入った状態の『**花王石鹸五十年史**』（１９４０年刊）を目にしました。『**花王石鹸五十年史**』と、創業者の『**初代長瀬富郎伝**』の二冊が一つの箱に収まっています。県立川崎図書館では、前者は社史、後者は伝記と、別の分類番号が付けられて、置き場所も分かれています。そして、外箱も失われていたので、そもそも二冊で一組であることに、私は気が付かなかったのです。

社史の外箱を積極的に残しておくようにしたのは、ここ４、５年のことです。それ以前は、よっぽど装丁に特色ある外箱しか保存していませんでした。たとえば『**銀座伊東屋百年史**』（２００４年刊）や『**日清食品５０年史**』（２００８年刊）などは、装丁のユニークな社史として「社楽」７号でも取り上げています。

社史の本体だけでなく、外箱の内部がグラデーションの色合いになっている『**千島土地株式会社設立１００周年記念誌**』（２０１２年刊）も「社楽」１９号で紹介しました。グラデーションは日の出から日の入りまでの空の色を表現していて、その積み重ねで百年になったというメッセージと、うかがったことがあります。

外箱ではありませんが、奈良県の広陵町靴下組合による『**広陵町の靴下百年史**』（２０１３年刊行）は、本体が靴下に収められています。「社楽」２５号で紹介しました。

そのほか、トラックの荷台を模したケースになっている『**日本フルハーフ５０周年記念社史**』（２０１３年刊）、表紙に印字された所有者の名前が見えるようになっているケースの『**富士ゼロックス５０年のあゆみ**』（２０１３年刊）、高級な洋菓子の入れもののような『**医学書院の７０年**』（２０１４年刊）なども、特色のある外箱です。

内側に写真を配置し、外箱に開けられた窓（穴）から覗けるようにした『**北海道とともに５０年　ＨＢＣ**』（２００２年刊）には、テレビ局の社史ならではの工夫を感じます。

最近は、デザイン性を重視した外箱も増えています。社史ができるまで講演会でも、装丁へのこだわりをよく講師からうかがいます。

ひと目でそれとわかるパッケージを見て、○○会社さんが社史を作ったら、これをアレンジした外箱にしたら面白いのに、と想像してみることもあります。（関東なら鳩の描かれている黄色い箱とか、関西なら３桁の数字の入った赤い箱が頭に浮かびました）。

（科学情報課　高田）

●お問い合わせ先　**神奈川県立川崎図書館　科学情報課**
210-0011　川崎市川崎区富士見２－１－４
電話：044-233-4537　ＦＡＸ：044-210-1146
http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html